

# 株式会社ウエストトラスト・ ライフサポート

## ■ JR 富士駅直結の交通至便な 場所で介護施設を経営

JR 富士駅南口からペデストリアンデッキで直結する富士駅再開発ビルに株式会社ウエストトラスト・ライフサポートの本社と介護付有料老人ホーム・サービス付き高齢者向け住宅「富士山するがテラス」があります。リビングから雄大な富士山と駿河湾が望める、これだけの好立地に恵まれた福祉施設は全国的にも珍しく、経営する西尾公雅代表取締役の施設経営に懸ける意欲がうかがえます。

西尾氏が同社を設立したのは平成25年のことです。富士駅南口周辺を対象とした駅再開発事業で、地権者の一人として建設組合の理事長を務めていた時です。「生まれ育った地元富士市が活気を取り戻してほしい」と思った西尾氏は「衣食住の住と、それに付随する福祉のビルとして、地域の包括ケアシステムの核となる拠点としたい」と考え、介護業界への参入を決意したと言います。



株式会社ウエストトラスト・ライフサポート  
＝富士市横割本町

## ■ 福祉の拠点に一 熱意が評価され表彰も

西尾氏は「再開発ビルは半分が住宅フロア、半分が商業フロアということが多く、初めは商業施設の誘致も考えました。しかし商業施設の誘致は難しく、それなら医療や介護の施設を整備した方が上手くいくのでは、と思い直しました」と話します。再開発ビルの上手な活用、地域福祉への熱い思いは公益社団法人全国市街地再開発協会からも高く評価され功労者表彰を受けたほどでした。ただ富士市の介護現場での有効求人倍率は5倍を越すほどで、人手不足への対応は待ったなしの状態でした。

しかし西尾氏には腹案がありました。大学卒業後、大手コンビニエンスストア本部に正社員として勤めましたが、コンビニ業界も人手不足は同じ。そこで当時から、パート・アルバイトの従業員の働きやすい曜日や時間を聞いて、短時間労働を実践してきたということです。父親の介護や透析への付き添いで長時間働けない人たちに、どのように働いてもらって人手不足を解消するか、という課題に対して、西尾氏の解決策が短時間労働だったというわけです。まだ知名度の低い企業で働いてくれる人を探すのは大変なことです。働く人たちへの間口を広げ、働きたい人ならだれでも採用しようという方針を固めたのもそのためだということです。

## ■ 生活をしながら資格を取得 生活保護から自立へ

同社には「富士山するがテラス」のほかにもう一つ、市内松岡に「富士山松岡ガーデン」というサービス付き高齢者向け住宅があります。「富士山するがテラス」より半年前の平成

29年に開設しました。こちらは定員29室ですが、すぐに満室となり、入居希望者は後を断ちません。

同社はこの2つの施設に富士市ユニバーサル就労支援センターとマッチングした8人の職員を採用しています。うち6人は清掃業務ですが、1人はヘルパー2級の資格を持つ女性、そしてもう1人は清掃要員として同社に入ってから、介護職員初任者研修を終了して介護の仕事をする50代の男性です。

介護業界が人手不足となる一つの理由として、富士山松岡ガーデンのような施設におけるヘルパー業務は国の配置基準が厳しく、現在は入居者3人に1人の配置が義務付けられていることがあります。ヘルパーが不足すると、たとえ立派な施設を整備しても空室にしておかざるをえなくなります。このため同社では、清掃業務の一員として採用した職員にも可能な限り資格の取得を働きかけます。

「もし他の施設で働くことになっても資格があれば働きやすい。それにヘルパーになれば本人の給与があがります。清掃を含めた雑用だけでは最低賃金にちょっとプラスされる程度しか出せませんが、資格があるだけで時給は70円ほど上がります」と西尾氏は話します。

実際に資格を取得したYさんは今、富士山松岡ガーデンで働いています。Yさんは脳梗塞の後遺症で足が不自由になり、家の中にこもりきりになっていたそうです。母親も寝たきりのため、ほぼ4年間、家にこもって暮らしていました。しかし昨年、市の勧めもあってユニバーサル就労支援センターで支援を受けるようになり、3月に5日間の無償コミューターを実施したのちに、正式に雇用契約を結んだということです。4年間のブランクは大きく、初めは階段の上り下りも大変だったため週16時間勤務でしたが、徐々に増やして今では普通に1日8時間の仕事をこなしてい

ます。さらに西尾氏の勧めもあって資格取得に挑戦、令和元年12月に介護職員初任者研修の終了試験をクリアして、晴れてヘルパー業務に携わることも出来るようになりました。今ではシーツの交換や入浴の補助なども行い、入居者に可愛がられているとのこと。

Yさんは「人見知りで初めは心配だったけど、やってみたらなんとか出来るようになりました。今では誰とも普通に話せます。生活保護を受けていた3年間は、いろいろ制約があり大変なこともありましたが、今は自由になって身軽になりました」と喜んでいました。

同社にはもう1人、資格をもちながら外で働くこともなく、母親の介護などのためほとんど家にひきこもっていた女性もいますが、今では入居者の介護に欠かせない人材となっています。

## ■働く意欲があれば採用へ

西尾氏は「人手不足はこの業界も同じ。ここで働きたい、社会に出たい、という意味さえあれば多少のハンデがあっても採用します。多少動作が遅くても入居者との関係が普通にできるような性格の良さがあれば構いません。働く人が充実感を得られるような仕事をしてもらえれば」と話します。

同社では事務の仕事でも今、仕事を業務分解して短時間労働を実践しています。これから会社が大きくなればバックオフィスの仕事も増えます。「障害のような働きづらさを抱えていても人物本位で間口を狭めない採用が大切だと思います」と、西尾氏は今後も積極的にユニバーサル就労を取り入れていく考えを強調しました。



西尾公雅代表取締役